

## 1 生活科における教育課程編成上の課題と指導上の留意点

### (1) 目標・内容の明確化・構造化

#### ① 生活科の目標〈図 1〉

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養う」ことである。活動や体験を通すことと、身に付けさせる力を明確にしておくことが大切である。

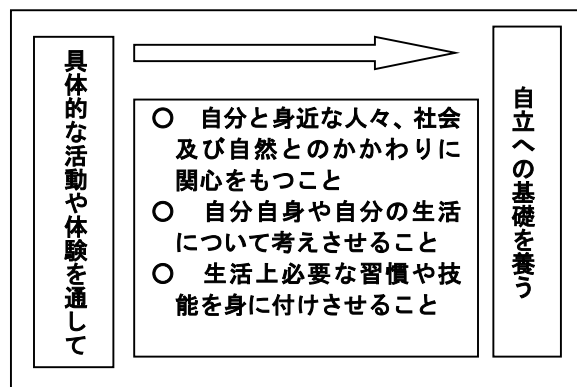


図 1 教科目標の構成

#### ② 学年の目標〈図 2〉

2 学年共通、4 項目で構成されている。(解説 P14)

- (1) 自分と人や社会とのかかわり
- (2) 自分と自然とのかかわり
- (3) 自分自身
- (4) 生活科特有の学び方 (活動と表現)

- ・ 目標(1)(2)(3)の記述は、主な学習対象、思考や認識、能力や態度等を要素として示している。
- ・ 目標(3)は、働きかける対象への気付きだけでなく、自分自身へと気付きが質的に高まることを示している。小学校低学年のメタ認知 (自分へ向かう認識) ともいえる。
- ・ 目標(4)は、活動と表現を関連させた、生活科特有の学び方である。生活科は対象を学ぶのではない。そこが理科や社会と違う点。対象と自分とのかかわりを生み出すために活動し、得た感覚を確かなものにするために表現し認識していくのが生活科の学びである。そこに、生活科の存在価値がある。

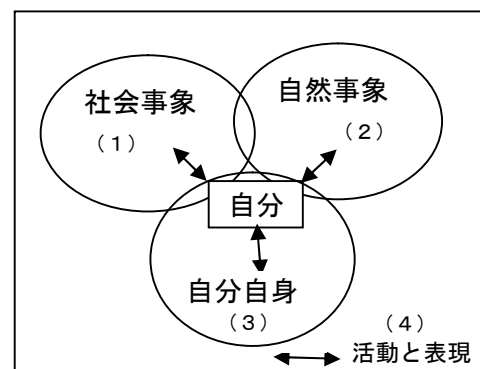


図 2 学年の目標の関係

#### ③ 内容の構成要素と階層性

- ・ 生活科の内容は9 項目で構成されており、階層性がある。(解説 P22)
- ・ 各内容の記述には、「学習内容・学習活動等」「思考・認識等」「能力・態度等」の三つの要素を組み込まれ、一文で一体的に示されている。このことは、知識を学ぶのではなく、活動と認識を伴いながら能力が育っていくという生活科の学び方が意図されている。(解説 P23)
- ・ 内容 (9) 「自分の成長」(解説 P38) は大切な内容であるが、取り扱いに十分配慮すること。誕生や生育にかかわること、家族へのインタビューは、場合によっては好ましくないばかりか児童の心に大きな傷を残してしまうことがある。配慮のある丁寧な指導と保護者への周知を心がける必要がある。

## 2 学習活動に関する留意事項

### (1) 気付きの質を高める

低学年の場合は、体験の中でいろいろ気付くが、それが自分の中で明確に意識化されていないこ

## 小学校 生活

とが多い（無自覚の状態）。発話により意識化させて自覚したり、一つ一つの事象を比較したり関連付けたりさせて思考したり、対象の変化に気付くと同時に、そこに映し出される自分自身の成長に気付いたりしながら、気付きの質を高めていくように働きかけることが大切である。

### (2) 体験活動と表現活動の相互作用〈図3〉

- ・ 体験活動で感じた歓喜や興奮を、少しだけ落ち着いて振り返り、言葉にして紡ぎ出すことで思考と表現が一体化し、確かな学びに高まっていく。
- ・ 表現活動に没頭するには、やらされるではなく自分からやりたくなる仕掛けが必要である。対象と一体化する工夫をすると対象になりきって表現したりする。（例：朝顔キャップをかぶる）
- ・ 体験活動と表現活動が相互に作用しながら高まっていくには、表現活動を相手意識や目的意識のある必然性を伴った活動にすることが大事である。そして、表現活動が、次の体験活動へ主体的に結び付いていく学習のプロセスを充実させることこそが生活科では重要である。

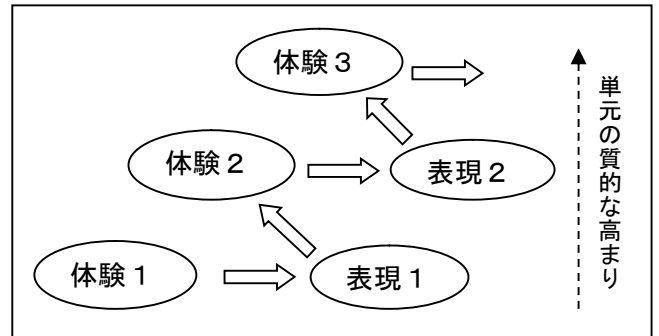


図3 体験活動と表現活動の相互作用

### (3) 主体的に学習に取り組む態度の育成〈図4〉

体験活動に没頭し、表現活動に没頭すると、児童は様々な気付きを生む。この時に手応え感覚（充実感、達成感、自己有能感、一体感）を得て、意欲（好奇心、自立的欲求、向社会的欲求）を高めていく。こうした好ましい循環を何度も経験することで、安定的な心的傾向性つまり態度を形成することができる。

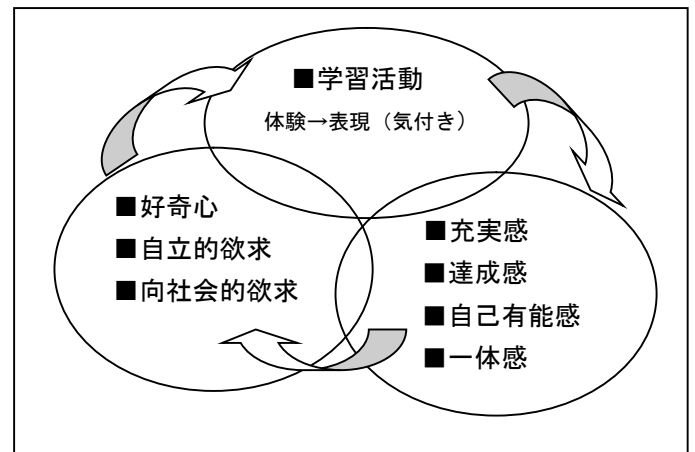


図4 主体的に学習に取り組む態度の育成

### (4) 学習評価

- ・ 「評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 生活】」（平成23年文科省）の各内容の評価規準の設定例を活用するとよい。
- ・ 教師は、目に見えないものを見取らないといけない。児童の姿や作品等を時系列で見たり、関連付けて見たりすると、事実が本質的に見えてくる。
- ・ 評価規準は階層ではない。具体的な子供の姿を何通りか考えられれば汎用的に見ることができる。その中で具体を語る力がなければならない。

## 3 その他

- ・ 次の学習指導要領改訂に向けて、注目されているのが「アクティブ・ラーニング」（主体的、協働的に学ぶ学習）である。今までの問題解決学習、体験学習、言語活動等をより充実させ、確かな方法でどこでも行えるものにしていこうというものである。生活科は「アクティブ・ラーニング」を象徴する学習である。
- ・ 幼小の接続について、スタートカリキュラムを適切に作り運用するカリキュラム・マネジメントが求められている。スタートカリキュラムセット（平成27年1月文科省）を活用してほしい。
- ・ ICTの活用については、体験や表現をバーチャルにすることは好ましくないが、生活科の目標や内容を受けてその実現に向けて使うのはよい。例えば、実物投影機やタブレットを使って大きな画面で共有する等は効果的である。